

風景美とピクチャレスク

——旅行記、庭園論における森林と雑草の描写について

Landscape Aesthetics and the Picturesque : Trees and Weeds in Travel Writing and Garden Theory

今村 隆 男

Takao IMAMURA

2005年10月7日受理

1

18世紀のイギリスは、森林伐採がかなりのスピードで進んだ時代で、世紀始めにおよそ16%であった森林面積は世紀末には5%程度にまで激減している。18世紀の後半にイギリスにおいて流行したピクチャレスク趣味の大御所ギルピン(William Gilpin)は、その旅行記のあちこちで森林伐採の現状を憂えているが、特に森の木々の風景を扱った『森林風景論』(*Remarks on Forest Scenery*, 1791)の最終節においては、森林の風景美のはかない運命に対して「ため息をつきながら自らの観察を閉じ」つつ、大規模な伐採が風景を変えてしまったことを嘆く。

But the landscape, which depends chiefly on *wood-land scenery*, is always open to injury. Every graceless, hand can fell a tree. The value of timber is it's misfortune. It is rarely suffered to stand, when it is fit for use; and in a cultivated country, woods are considered only as large corn-fields; cut, as soon as ripe. . . . (Gilpin 2 305)

ギルピンにとって、材木としての森林の価値は、その景観の大きな不幸だった。そして、森林伐採が進むのと併行して、植林が奨励されていったことは当然であろう。「小麦畑のように、実るやいなやすぐに切られる」という植林・伐採についてのこの表現からも明らかのように、ギルピンは商業経済によって景観が多大な影響を受けていることを批判している。これは、19世紀ロマン派の詩人ワーズワス(William Wordsworth)が『湖水地方案内』(*Guide to the Lakes*, 1810-1835)の中で、植林を「植物産業」(“vegetable manufactory”)と批判したのと同じ立場であろう(*Guide* 82)。

クロード・ロラン(Claude Lorrain)などのイタリア風景画に触発されて興ってきたピクチャレスク・ツーリズムは、専ら風景を見るための旅であったが、この時代に書かれた旅行記などには、風景を構成する不可欠の要素として森の木々がしばしば取り上げられている。また、18世紀は囲い込みによって現在にも残る風景式庭園の多くが出現した時代であったが、当時の庭園論で議論されたのも、庭園内の風景を美しく見せる重要な要素である木々であった。そして、風景の美しさとは何かを問う中で、下草や雑草の扱いについても木々同様の議論が行われた。そこで本論では、18世紀後半の旅行記や庭園論・詩などを取り上げて、森林や雑草のある風景がどのような視点から描かれているのかを吟味し、自然観の大きな変化を明らかにしてみたい。

2

ピクチャレスク・ツーリズムの目的地として大きな人気を呼んだ場所の一つは、現在でも夥しい数のツーリストの集まる、イングランド北西部の湖水地方であった。そこで、まず初期の湖水地方の旅行記の中からハチンソン(William Hutchinson)とグレイ(Thomas Gray)の作品を取り上げ、森林風景がどのように描写されているのかを中心に検証してみたい。

ハチンソンの『ウェストモアランド・カンバーランド湖水紀行』(*An Excursion to the Lakes, in Westmoreland and Cumberland, August 1773*, 1774)は、ピクチャレスク趣味の専門用語を多用しながらも、同時に景観保護の視点が早くも見出されるという意味で興味深いものであると思われる。この旅行記の中で特徴的なのは、湖に浮かぶ二つの小島の描写である。まず、アルズウォーターからケズウィックに入ったハチンソンは、ダーウェント湖に浮かべたボートの中から滝の音を聞きつつ湖内の小島(Vicar's Island)を眺め、青々としたシカモア(西洋楓)が離れ屋を覆っている「ピクチャレスク」な風景の美しさを描いているが、次に訪れた時には、所有者の「強欲」(avarice)のせいでシカモアの木々が切り倒されて「美が損なわれた」ことを嘆く。すなわち、ここでハ

チンソンは美観の視点から樹木の伐採を批判している。続いて、彼は北から湖水地方中心地のグラスミアとライダグルに至り、両地が「平和」で「幸せ」な「隠棲地」であるとグレイとも共鳴する表現を使った後、ウィンダーミアに至り、その中の最大の島であるベル・アイル(Belle Isle)を取り上げ、所有者イングリッシュ(Mr English)による島の景観の変化を次のように批判している。

The few natural beauties of this island are wounded and distorted by some ugly rows of firs set in right lines, and by the works now carrying on by Mr English, the proprietor, who is lying out gardens on a square plan, building fruit walls, and preparing to erect a mansion-house. — The want of taste is a misfortune too often attending the architect. . . . (Hutchinson 187-8)

わずかにオークやシカモアを残して伐採された木々の代わりには、「整然と並べられた醜い樅の木の間」が植林されて全体の景観を台無しにしており、庭園はフランス的な幾何学模様仕切られていてキャベツ畑まで広がり、「オランダの市長の宮殿」が建っていると趣味の悪さを嘆き、その景観は「あまりにも眼に不快なもので、旅人は嫌悪感から背を向ける」(188)とまで言っている。この「宮殿」のような建物は、実際にはクロード・ロランの風景画を基にして建てたチズウィックやスタウアヘッド庭園の中の有名な建物をさらに真似して造ったもので、そのころ湖水地方にまで押し寄せていた、外来の者達による土地の「改良」(improvement)ブームによって建てられた別荘の最初の例であった(Watkin 109-110)。その趣味の悪い建物や庭園と同様にハチンソンの批判が向けられているのは、間もなく多くの旅行記などの中で「外来の」木として攻撃される樅の木の醜い植林風景である。その「整然と一列に並んだ」人工的な不自然さと対照的に、彼はライダグル近くの森を、“The ground. . . is prettily diversified with irregular knots of trees, situated with such agreeable wildness and irregularity, that they seemed to be the work of nature. . . .” (Hutchinson 180)と描いて、「見事に多様」で「不規則な木々の一団」の風景の素晴らしきは「自然のなせる業」であることを強調し、自然の景観に人間の手を入れることに自然保護的な観点から反対している。

一方で、ここにみられる“agreeable wildness”という表現は、完全な手つかずの自然への恐怖心が未だハチンソンの自然観には存在したことを示していると受け取れる。また他の例を挙げると、彼は、

There is not any thing can give greater satisfaction to the eye of the traveler, than to behold cultivation and industry stretching their paces over the heath and waste, the forest and the chase: — population must follow, and riches ensue. (Hutchinson 43)

と述べ、耕作や産業活動の跡が確認できるような風景の方が「大いなる満足」を与えてくれると風景の有用性を強調しているし、雑草の蔓延る風景から彼が感じ取るのは、後に取り上げるプライスらのように自然の持つエネルギーではなく、過去の歴史へのセンチメンタルな回想でしかない(269, 272)。これらのことは、ハチンソンの自然観の時代的な限界を示していると考えることができる。この自然への恐怖心は、強調はされずとも以後も旅行記の中に残り、それがほぼ消滅してエコロジーの視点から雑草の蔓延る風景を美しいと感じられるには、プライスらの活躍する18世紀末を待たねばならない。しかし、ヤング(Arthur Young)やマーシャル(William Marshall)らの著作が示すように、「有用性」(utility)重視の風潮が非常に強かった70年代に書かれたハチンソンの旅行記において、「自然」(Nature)が「人工」(Art)より優位にたっていることは見落とすべきでないと思われる。

3

ハチンソンの旅行記の翌年には、湖水地方のガイドブックの流れを作った詩人グレイの旅行記が出版されている。グレイは、1769年の秋、同行予定だった友人のウォートン(Thomas Wharton)が病になったため、一人で湖水地方へ15日間の旅行に出かけ、その模様をウォートンに読んでもらうためにジャーナル(日記)の形でまとめている。このジャーナルは、グレイの死後、ピクチャレスク趣味が流行し始めた1775年になってから彼の詩作品と共に出版され、さらに1780年以降、ベストセラーとなったウェスト(Thomas West)による湖水地方のガイドブック(*A Guide to the Lakes*, 初版1778年)の中に収められて広く読まれることになったものであり、その結果、彼の描写は他の多くの旅行記やガイドブックの内容に影響を与えることになった。

このジャーナルの中でおそらく最も有名な箇所は、のちにワーズワスが住むことになるグラスミアの谷を「楽園」と呼んで絶賛している部分であろう。

not a single red tile, no flaming Gentleman's house or garden-walls break in upon the repose of this little unsuspected paradise, but all is peace, rusticity, and happy poverty in its neatest most becoming attire. (Gray 88)

グレイは、ケズウィック経由で北からグラスミアの谷を眺め、そこに静かで鄙びた「楽園」を見出したが、その30年後、新しい住居を構えてドロシーと生活を始めることになったワーズワスは、その時の心境を謳った「グラスミアの我が家」(“Home at Grasmere”, 1800)の中で、反対の南側のラフリッグ・テラス(Loughrigg Terrace)からこの谷を見下ろして、グレイと同じ「楽園」(MS. B 12)という言葉を使って、そこに理想郷を描き出している。生涯の殆どを湖水地方の住民として過ごして周囲の農民たちの事情に詳しくたワーズワスとは異なり、旅人として通過しただけのグレイは、「幸せなる貧困」という表現などが示しているように、田園地方に住む農夫たちの実際の生活の労苦などを見ずして理想化しているが、寛大で自己満足的なこの描写は、18世紀において湖水地方の町を描く際の一つの典型となってゆくのである。また、他にも、ピクチャレスクの眺望を見晴らせる高台を示す“station”や、眺望される場所を表現する“amphitheatre”などの用語の使用、どんな風景でもピクチャレスクの構成に変えて見せてくれるクロード・グラスへの言及など、グレイの湖水地方ジャーナルがピクチャレスク趣味の確立に果たした貢献は極めて大きい。

ところが、距離を隔てて詳細にはこだわらずに風景の全体的構成を絵画的に楽しむ一方で、ギルバート・ホワイトやペナントと親交がありリンネを熟読していたグレイは、「眺望」的描写とは別にしばしば詳しい観察力もこのジャーナルの中で見せているが、むしろ、そこにこそグレイ独自の描写の特徴がよく現れていると思われる。グレイが特に詳しく描写しているのは気象や植物、或いは鳥などの野生動物の様子であるが、その中の木々の風景の観察は特筆に値する。風景画の影響のもとに対象を鑑賞していた当時の観光客とは異なり、グレイはオークやトネリコ、樺、柾、柳、トウヒなど、周囲に見られる木の種類を判別しており、また、ダンマラート(Dunmallert 33)やロドア(Lodoor, 46)近辺の丘、クロー・パーク(Crow Park, 59)、クックシャット・ヒル(Cockshut-hill, 59)など、行く先々の場所でオークの原生林の森の伐採やスコットランド樅の大規模な植林などに注目し、森林風景の変化を敏感に感じ取っている。グラスミアの隣、ワーズワスが終の棲家と定めたライダルでは、ライダル・ホールの地主フレミングについて、次のような記述を残している。

. . . on the opposite banks large and ancient woods mount up the hills: and just to the left of our way stands Ridale-hall, the family seat of Sr. Mic. Fleming, but now a farm-house, a large old fashioned fabrick surrounded with wood and not much too good for its present destination. Sr Michael is now on his travels, and all this timber far and wide belongs to him, I tremble for it when he returns. . . . (Gray 88)

当時、フレミングはグランド・ツアーで大陸に行っていたが(92)、その莫大な出費を賄うためにも帰国後のフレミングが辺りの自分の領地の「昔からの広い森」の木々を切り払ってしまうであろうことを予想して、グレイは「身震いする」のである。当時は、大陸へのグランド・ツアーの他、大庭園の「改良」や別荘の建設、産業活動への投資、個人的遊興費などのために多大な費用をかける場合、高く売れる領地内の木々を伐採して売り払うことが多かったが、フレミング所有のライダルの森の場合にもグレイはそのような可能性を予想したのであろう。「理想郷」グラスミアの隣のライダルの森の美しさをハチンソンがただ賞賛していたのに比べると、グレイの先見の明は注目に値する。グレイの次の時代、切り払われた「昔からの」森の跡地には、モミやマツなどの種類の外来種の木々が夥しい勢いで植林され、『湖水地方案内』におけるワーズワスの有名な「落葉松」批判に繋がってゆく。それを遡る事40年前、グレイは早くも森林伐採による景観破壊に着目して非難の目を向けているのである。

4

1780年代以降、植林に関する記述が増えてくるが、大規模な風景式庭園の造園ラッシュを背景に出版されたメイソン(William Mason)の『英国庭園』(*The English Garden*, 1783)には、新しい植林観の展開が認められる。造園家ケイパビリティ・ブラウンによる風景式の大庭園を支持するメイソンは、雑草などの近景を構成する細部のものには触れていないが、一方で重要な中・遠景の構成要素である植林については詳しく解説している。彼は、植林される木の種類を二つに分け、榆、栗、オークは風景全体の中で調和するという理由で望ましいとし、一方で、早く成長するという理由で増えている松(Pine)類については、その「矢のような先端(arrowy head)が空を襲う」(3. 108-112)のようなイメージを与えるから、また、松の種類に属するスコットランド樅については、その陰鬱な感じが

地平線の景観を汚すから、という審美的な理由で各々批判する。有用性を排したブラウンによる風景式庭園を支持するがゆえに、メイソンは美観を優先しているのであるが、その美観の根拠は、周囲の景観との「調和」の視点から異質なものを拒否する見方である。続けて詳しく述べられているように、前者のグループを彼が賞賛するのは、それらがイギリスに元々あった、その風土、気候に適合した木で、後者を批判する理由は、それらの木が、より寒い土地から来たよそものであるからだ。

メイソンが庭園造りの際の一つの指針としているのは、「自然」と「人工」の関係がどうあるべきかという問題であるが、彼は両者が互いにバランスを取って協力し合いながら理想的な庭園を造るべきだとした後、次のように言う。

Nor will her [= Art's] prudence, when intent to form
 One perfect whole, on feeble aid depend,
 And give exotic wonders to our gaze.
 She knows and therefore fears the faithless train :
 Sagely she calls on those of hardy class
 Indigenous, who, patient of the change
 From heat to cold which Albion hourly feels,
 Are brac'd with strength to brave it. These alone
 She plants, and prunes, nor grieves if nicer eyes
 Pronounce them vulgar. (Mason 3 240-249)

このように、メイソンは寒暖の変化に強い固有種(或いは在来種、Indigenous)を洗練さがないと言われようと敢えて擁護し、外来種(exotic)の木として、木蓮、杉、樅などを挙げ、イギリス(Albion)の気候に合わないこれらの外来種を移入すべきではないとする。この主張の背景には、珍しい植物を無秩序に国内に持ち込んで喜ぶ当時のガーデニング・ブームに対する批判と同時に、18世紀において高まっていたナショナリズムの影響が見出せるように思われる。メイソンは、その土地の環境の特徴をよく考えて植える木の種類を選ぶようにと主張しているが、そこで彼がその自然環境を作り上げる「時間」(Time)の役割を強調していることは重要である。「自然」と「人工」を平等に扱いながらも、メイソンは人の手(Art)による性急な庭造りを否定して、時間がゆっくりと作り上げた自然の景観から庭園造りを学ぶよう説いているが、ここには、次の世代によって引き継がれてゆくエコロジックな自然観の萌芽が認められる。

5

若きワーズワスが典型的なピクチャレスクの風景を模倣しようとした習作「叙景スケッチ」(“Descriptive Sketches”)の翌年の1794年に出版されたのが、ピクチャレスク第2世代の2人の隣人、ナイト(Richard Payne Knight)の『風景詩』(*The Landscape: a Didactic Poem*)とプライス(Uvedale Price)の『ピクチャレスク論』(*An Essay on the Picturesque*)であるが、ワーズワスが気づかないうちに、そこでは自然観の大きな変化が起こっていた。

ナイトは、メイソンが目にした自然を形成する「時間」や「気候」(Weather)が作り出す風景美にさらに傾倒していった。ナイトは、人の手を排して「放って置く」(neglect)ことで自然は“naturalize”され、それがピクチャレスクな景観を産むと、画期的な主張をする。ナイトにおいては、「人工」に対し「自然」は圧倒的な優位に立ったと言える。ニンフに向かって語りかける形で、ナイトは、

Your favourite plants, and native haunts protect,
 In wild obscurity, and rude neglect ;
 Or teach proud man his labour to employ
 To form and decorate, and not destroy ;
 Teach him to place, and not remove the stone
 On yonder bank, with moss and fern o'ergrown ;
 To cherish, not mow down, the weeds that creep
 Along the shore, or overhang the steep ;
 To break, not level, the slow-rising ground,

And guard, not cut, the fern that shades it round. (Knight 2 190-199)

と理想の風景を描き出す。ここで彼は、植物は本来、「自生していた場所」(native haunts)にあるべきだと主張した後、コケやシダで覆われた岩や岸辺の雑草などでも景観の中から取り除くことに反対し、neglectされた風景をできるだけ残すように説く。ナイトにとっては、人間が手を加えずに放って置かれることで、風景はより美しくなるのである。植林する木の種類については、「自然」の手が適切な土壌、気候の場所に種を蒔いた木々を選ぶようメイスンの主張に沿って忠告し、無限に多様な風景を作ることを目論んで「外来種」をむやみに選ばないようにと、次のように諫める。

Choose, therefore, trees which nature's hand has sown
In proper soils, and climates of their own ;
Or such as, by experience long approved,
Are found adopted by the climes they loved :
All other foreign plants with caution try,
Nor aim at infinite variety. (Knight 3 37-42)

そして、イギリスの固有種であるオークやブナの「上品で控えめな緑色」(chaste and modest green)とは調和しない木として、ワーズワスが『湖水地方案内』の中で非難した落葉松の植林を取り上げ、次のように言う。

O Harmony, once more from heaven descend!
Mould the stiff lines, and the harsh colours blend ;
Banish the formal fir's unsocial shade,
And crop the aspiring larch's saucy head :
Then Britain's genius to thy aid invoke,
And spread around the rich, high-clustering oak : (Knight 3 57-62)

在来種の広葉樹とは反対に、硬直した並びや目障りな色彩が風景美の調和を乱す針葉樹の植林をナイトは嫌悪する。樅は「堅苦しく」「社交的でなく」、落葉松は「野心に燃え」「ずうずうしい頭」を持つとされている。『森林風景論』のギルピンは、「在来種」(native)や“naturalized”された種類の木だけを紹介するとしながら、落葉松を取り上げてエレガントで美しい木と説明していた。美観については個人的嗜好があり、また、特にナイトによる落葉松への比喩には、18世紀になって台頭してきていた新興商業ブルジョワに対する批判が重ね合わされているのが読み取れなくはないが、外来種へのナイトの強い拒否感の根底には、ワーズワス同様、生態系に配慮する観点が存在していると言えるだろう。

6

次に、プライスの『ピクチャレスク論』を取り上げたい。そこでプライスは、植林される木の代表的なものとして落葉松と樅を挙げ、各々次のような理由で風景美を破壊するとして批判する(Price 212-221)。落葉松は、「外観が最も単調」で、周囲の木々と混ぜた場合には、それだけ成長が早く、まるで煙突掃除用のブラシのように先が尖っており(“spire-like forms”)、色も独特で目立ち過ぎる、要するに周りとは調和しない。この表現は、「先の尖った木」(“spiky tree” *Guide* 86)というワーズワスの使った言葉と重なるものである。また、この尖った木の先端が「槍兵の軍団」のようだと表現するあたりは、ナイト同様、フランス革命批判にも通じるものであるだろう。一方、樅の木は大規模に植林されるため、この木の「単調に活気なく重苦しい」(“so uniformly dead and heavy”)感じが周囲と調和しないとメイスンに同調する。いずれにせよ、これらの木の植林は風景の美観に必要な「多様性」と「調和」を壊すというのが反対の理由である。

そして、プライスは次のように補足説明する。

It is not enough that trees should be naturalized to the climate, they must also be naturalized to the landscape, and mixed and incorporated with the natives. A patch of foreign trees planted by themselves in the out-skirts of a wood, or in some open corner of it, mix with the natives, much like a group of young Englishmen at an Italian conversazion. But when some plant of foreign growth appears

to spring up by accident, and shoots out its beautiful, but less familiar foliage among our natural trees, it has the same pleasing effect, as when a beautiful and amiable foreigner has acquired our language and manners so as to converse with the freedom of a native, yet retains enough of original accent and character, to give a peculiar grace and zest to all her words and actions. (Price 213-214 n)

プライスは、風景の美観が“naturalize”されて「調和」するべきだけではなく、木々もその気候風土に“naturalize”されて「調和」するべきであると説いている。そして、植物と気候風土の関連に向けられた彼の視点は、さらに「外来」(“foreign”)の植物と「在来」(“native”)、「固有」(“natural”)の植物との区別にも向けられている。この区別はメイスンやナイトにもみられたが、ここでプライスは、たとえ「外来種」の木であっても、自然に生えてきて周囲と調和しているものは、「在来種」同様、「喜ばしい効果」を持つとし、植林する場合は、元々あったものと同種の木を植林するよう薦めているが(Price 212)、これらの考え方は、200年前とは思えない先見であると言えるだろう。

1790年代、このような植林の問題との関連で考察すべきものとして、雑草の問題が登場するが、プライスは、ナイトよりも詳しく雑草のある風景が何故美しいのかを説明している。元々あった木々を切り倒したり、逆に一面に植林したりする、自らの宿敵とも言える「(ケイパビリティ・) ブラウン氏やその追隨者達」による人工的な「土地改良」について、プライスが書いた次の文章を引用してみよう。

There are several ways in which a spot of this kind near a gentleman's place, would probably be improved; for even in the monotony of what is called improvement, there is a variety of bad. Some, perhaps, would cut down the old pollards, clear the rubbish, and leave only the maiden trees standing; some might plant up the whole; other grub up everything. . . ; but there is one improvement which I am afraid almost all who had not been used to look at objects with a painter's eye would adopt, and which alone would entirely destroy its character; that is smoothing and leveling the ground. The moment this mechanical common-place operation, by which Mr. Brown and his followers have gained so much credit, is begun, adieu. . . to all intricacies, to all the beautiful varieties of form, tint, and light and shade; every deep recess—every bold projection—the fantastic roots of trees—the winding paths of sheep—all must go; in a few hours, the rash hand of false taste completely demolishes what time only, and a thousand lucky accidents, can mature. . . . (Price 27-28)

ブラウンの造園手法の単調さの持つ「多用な悪」(“a variety of bad”)の中でも最も問題だとされているのは、彼の「土地改良」が、木々を伐採するだけでなく、地所を徹底的に「滑らかで水平にすること」(“smoothing and levelling”)であり、それによって本当のあるべき「多様性」が無くなってしまおうと言う。非常に奥まった所、出張った所、とても風変わりな木の根っこ、曲がりくねった羊道——これらは「時間と数え切れない幸運な偶然」が造り上げた風景であり、ブラウンらの造園はそれを破壊してしまう。「どうでもよいような雑草をきれいに刈り取ってしまう」ことへの非難が象徴しているように、彼にとって自然は、人間が手を加えるのではなく放っておかれてこそ美しくなる。この引用文の少し先のところで、再びプライスは、羊がねぐらによく使っていた「あらゆる種類の雑草が繁茂していた」(“the rubbish of all kinds that used to grow about them” Price 1 34)という大きな木の根っこの隙間を「改良者」達が埋めてしまったことを非難する。ここには、ナイトからさらに進んで、自然と動物たちが共に作り上げる地域のエコ・システムの役割に着目する視点が見出せる。

「時間と偶然」の役割に関するプライスの考えは、「廃墟」(ruins)の意義について説明した次の引用文の中にも読み取れる。

A temple or palace of Grecian architecture in its perfect entire state, and with its surface and colour smooth and even, either in painting or reality is beautiful; in ruin it is picturesque. Observe the process by which time, the great author of such changes, converts a beautiful object into a picturesque one. First, by means of weather stains, partial incrustations, mosses, etc., it at the same time takes off from the uniformity of the surface, and of the colour; that is, given a degree of roughness and variety of tint. Next, the various accidents of weather loosen the stones themselves; they tumble in irregular masses, upon what was perhaps smooth turf or pavement, or nicely trimmed walks and

shrubberies; now mixed and overgrown with wild plants and creepers, that crawl over and shoot among the fallen ruins. Sedums, wall-flowers, and other vegetables that bear drought, find nourishment in the decayed cement from which the stones have been detached: birds convey their food into the chinks, and yew, elder, and other berried plants project from the sides; while the ivy mantles over other parts and crowns the top. (Price 46-49)

プライス以前のピクチャレスク美学においては、「廃墟」とは人間の努力や人間自身のはかなさを象徴する風景の装飾の一つであった。これは、庭園内の様々な対象が各々の象徴的意味を持っていた18世紀前半に流行したエンブレムの庭園からの影響であると言えるだろう。しかし、「時間と偶然」の持つ力の大きさを訴えたこの文章には、そのような従来の視点とは全く異なる価値をプライスが「廃墟」の中に見出していたことがわかる。重要なのは「天候」の持つ「偶然性」の役割で、廃墟の表面は、「時間と偶然」が施した作用によって変質して崩れてゆくが、そこには野生の鳥たちが種子を運んで集まって来て、「セダム」、「イチイ」、「エルダー・フラワー」、「ベリー類」や様々な雑草類(“rubbish”)が蔓延ってゆく。ここでもプライスは、野生動物や雑草による、自然のエネルギーのなせる技を描き出している。このような自然の“neglect”の力への注目は、ワーズワスの比較的初期の作品である「廃屋」(“The Ruined Cottage” 1797)の中の、廃屋となった主人公マーガレットの家が雑草に飲み込まれてゆく様子の描写にも見出せる(MS D. 510-25)。廃屋にからまる雑草やその上に銀色に光る雨露に目が留まることは、そこでも「自然のプロセス」に気づくことに結びついている。

ベイツは、このプライスの説明を引用し、その中に「廃墟」に浸透してゆく有機的生命、即ち植物の「素晴らしい再生力」を見て取って、プライスのこの観察力は「クロード・ロランよりもギルバート・ホワイト」的であると(Bate, *Romantic Ecology* 128-9)。しかし、自然の詳細な観察力では共通するものの、人間にとっての有用性を最上位に置くホワイトとプライスの間には一線を引く必要があり、プライスのこの文章は、むしろワーズワスが『湖水地方案内』の中で有機的生命を含む地域全体の「調和」を生み出す自然の力を賞賛する眼で風景を紹介していることに近いことを指摘すべきではないと思われる。両者の類似性が現れているものとして、ワーズワスが『湖水地方案内』の中の建物について説明した次の部分を挙げたい。

These dwelling, mostly built, as has been said, of rough unhewn stone, are roofed with slates, which were rudely taken from the quarry before the present art of splitting them was understood, and are, therefore, rough and uneven in their surface, so that both the coverings and sides of the houses have furnished places of rest for the seeds of lichens, mosses, ferns, and flowers. Hence buildings, which in their very form call to mind the processes of Nature, do thus, clothed in part with a vegetable garb, appear to be received into the bosom of the living principle of things, as it acts and exists among the woods and field; and, by their colour and their shape, affectingly direct the thoughts to that tranquil course of Nature and simplicity, along which the humble-minded inhabitants have, through so many generations, been led. (*Guide* 63)

理想の家屋とは「建てられたというよりも、その土地の岩から、本能によって成長してきた」ように見えるのが望ましい、と言う。「森や野原」にみられるのと同様の「自然の生命の原理」によって、やはりコケや羊歯、雑草の花等が蔓延り、まるで「植物の衣服」をまとったかのような状態に家屋がなるのがワーズワスの理想である。さらにワーズワスは、その建物に住む人間も、その「自然の生命の原理」の中に組み込まれているとして、人間自身をも含めた一つのエコ・システムを考えるとところまで達しているのである。

ワーズワスが『序曲』(*The Prelude*, 1805)の中で、ピクチャレスク的な自然観を「表層的」と批判したのはよく知られており(11 155-164)、ベイツもピクチャレスクとロマン派の間に、人間中心的(anthropocentric)であるかどうかという点に関して決定的な相違があると主張する(Bate, *The Song of the Earth*)。しかし、本論で明らかにしたように、現代のエコロジイ的発想に繋がる自然観の萌芽は、すでに18世紀後半のピクチャレスク時代の森林や雑草風景の描写の中に認められるのである。

Bibliography

Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. London and New York: Routledge, 1991.

- . *The Song of the Earth*. London : Picador, 2000.
- Gilpin, William. *Remarks on Forest Scenery, and other Woodland Views, (Relative Chiefly to Picturesque Beauty) Illustrated by the Scenes of New-Forest in Hampshire*. 2 Vols. London : R. Blamire, 1791.
- Gray, Thomas. *Thomas Gray's Journal of his Visit to the Lake District in October 1769*. Ed. Roberts, William. Liverpool : Liverpool Univ. Press, 2001
- Hutchinson, William. *An Excursion to the Lakes in Westmoreland and Cumberland*. London : J. Wilkie, 1774
- Knight, Richard Payne. *The Landscape, A Didactic Poem*. London : W. Bulmer and Co., 1794.
- Mason, William. *The English Garden. A Poem*. London : A. Ward, 1783.
- Price, Uvedale. *An Essay on the Picturesque, as Compared with the Sublime and the Beautiful ; and, on the Use of Studying Pictures, for the Purpose of Improving Real Landscape*. London : J. Robson, 1794.
- Watkin, David. *The English Vision : The Picturesque in Architecture, Landscape and Garden Design*. London : Jon Murray, 1982.
- Wordsworth, William. *Guide to the Lakes. The Fifth Edition*. Ed. E. de Selincourt. 1835. Oxford : Oxford University Press, 1977.
- . *Home at Grasmere : Part First, Book First, of The Recluse by William Wordsworth*. Ed. Beth Darlington. Ithaca and London : Cornell University Press, 1977.
- . *The Ruined Cottage and The Pedlar by William Wordsworth*. Ed. James Buttler. Ithaca and London : Cornell University Press, 1979.